

福祉のひろば

4

2010

特集

保育・障害・高齢分野の課題と参議院選挙

当面する社会福祉の争点と運動の課題

上野さと子／上坪 陽／吉本哲夫／泉谷哲雄

渡辺 潤

福祉現場で生き生き働くために
現場を励まし、元気が湧く「ひろば」セミナー開催

第一六回社会福祉研究交流集会（東京明星大学）リレートーク

宮田和明さん・横田昌子さんへの哀悼の辞

井原哲人／石倉康次



編集 総合社会福祉研究所



ひろばトーク

大阪市立大学・都市研究プラザ 水内 俊雄さん

雑誌『ホームレスと社会』を創刊して



みずうち としお

大阪市立大学都市研究プラザ教授（文学研究科地理学教授兼任）。都市の社会問題・住宅問題の現状や歴史的系譜、ホームレス支援などについての政治・社会地理学的研究に取り組む。著書に『モダン都市の系譜－地図から読み解く社会と空間』（ナカニシヤ出版・共著）、『創造都市と社会包摂－文化多様性・市民知・まちづくり』（水曜社・共著）など。

『ホームレスと社会』

2009年10月創刊、年2回刊。第2号は本年4月刊行予定。
定価1600円。

雑誌「ホームレスと社会」を 創刊して

水内 俊雄さん

屋外で野宿する人が、都市内の公園にあふれんばかりにブルーテントを張っていた、そうした時期の一九九九年、雑誌『shelter-less』（シエルターレス）が東京で発行された。「シエルターがない」という当時の時代状況を反映させつつ、「路上から現代社会を問う」という鋭い視角から、NPOやボランティア組織、日雇労働運動、市民運動団体、そして当事者などに、唯一、発言や提言、課題の摘出、議論などを保証してくれるユニーケな雑誌として、季刊で三六号まで発売されてきた。行政が施策を進めていくうえで、窓口対応中心の現場ではホームレス状況をキヤッチすることができないなか、その役割は多方面に發揮された。

安江鈴子さんが中心に編集にあたつたが、刊行元のNPO新宿ホームレス支援機構での継続出版が困難ということがわかり、この貴重なメディアを失うことは、ホームレス支援のみならず、日本の社会保障の再編成に資する人材やスキルを失うことにもつながるという危機感を、私は『Shelter-less』編集委員のひとりとして持つた。ただちに同僚の全泓奎さんや、大阪府立大学の中山徹さんにも声かけし、安江さんは引き続き編集業務の柱として活躍してもらうことを前提に、福島、東京、大阪、大分在住の編集委員から構成する『Shelter-less』の後継誌を明石書店から発刊することが可能となつた。舞台裏的には、厳しい出版事情と読者層の懐といふことも鑑み、私や全さんが所属する都市研究プラザからの出版助成もとりつけ、『Shelter-less』の販価からあまり差がないよう、紙数増とのバランスに努めた。

近年、ネットカフェ難民、派遣切りなど、相次ぐ不安定居住の人々の支援課題も含みこむホームレスという言葉を使用し、同時にサブタイトルに「つながり合う、つなげ合う、

エンパワメント・ジャーナル」という、社会での支援のネットワークの展開と人の力やケア、スキルの開発するに資するという意味をこめて、『ホームレスと社会』というタイトルを新雑誌名とした。

『Shelter-less』はある種、自由なジャンルで臨機応変に対応してきたが、本誌では、レフエリー制度を導入することにより、研究者からは質の高い論文を寄稿できると同時に、投稿のインセンティブを高める「論文」というジャンルをきつちりと位置付けることにした。また国内研究のみならず、毎号からはず海外研究（翻訳も含む）を掲載することにして、海外にも広がる支援のネットワークづくりも展望できるようにした。支援のスキルという観点からも、とくに現場の支援者からの援助技術というジャンルの投稿、寄稿もきつちり制度化し、『Shelter-less』のひとつ特徴であった当事者からの貢献というところで、連載やコラムの継続的掲載に努め、さまざまなローカルな支援の状況を短報的に掲載し、支援状況の情報の共有をめざしたローカルレポートも用意した。

ホームレス支援は福祉、就労、住宅、地域生活、権利擁護から野宿そのものの自己表現まで、と実に多岐にわたり、支援の考え方も進め方も、書き手もそれぞれである。不毛な対立よりは、フェイス・トゥ・フェイスのダイアログ、対話というものも重視し、論点や課題の摘出と共有をはかる座談会やインタビューも本誌の目玉とした。

不安定な社会状況が今後つくことが予想され、社会の最前線に迅速に向かい、状況を的確に知らせる使命は、今後の社会の仕組みづくりに必ずや資するであろう。そうしたミッションを常に念頭に、勢いある元気づく誌面づくりに努めたい。ぜひご購読を。